講義名	発達心理学					授業形態	
担当教員	吉村　典子	開講期・曜日・時限	後期 火曜日 ２時限				
		単位数	2	履修開始年次	２年生	ナンバリング・コード	

主題と概要

「ヒト」は生物の一種として生まれ、「人」という社会文化的な存在へ、他者とかかわりながら育っていく。そして、次世代を育み、やがて死に至る。この過程における心の機能や行動の変化を発達ととらえ、人の心がどのように発達していくのか、社会とのかかわりを通して考察していく。

到達目標

本講義の目標は、人の理解と援助において、発達的な視点を持つことができるようになることである。そのため、以下のことができるようになることを目標とする。

①人が社会との関わりの中で、どのように発達するのかを理解する。
②各発達時期の発達の特徴や、発達の理論について知識を得、理解する。
③発達上不適応とされる問題について考察する。

提出課題

毎回の講義後に、講義内容について簡単な質問を課す。また、内容についての意見や考察の記述を求めることがある。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法

前回の問題の解答を授業の最初に説明する。理解度チェックテストについては採点して次週に返却し、解説する。訂正し再提出すること。

評価の基準

授業中の態度、毎回の問題の解答を合わせて20%～25%程度
理解度チェックテスト（１，２）は20%～25%程度
期末試験は50%程度

なお、６回以上の欠席がある場合は、その時点で評価対象から除外する。特別な理由がある場合は、連絡すること。

履修にあたっての注意・助言他

基本的な受講マナーを守ること。
講義で取り上げる心理学的知見は限られているので、興味や疑問を持った内容は、自分で調べ、学習する姿勢を持ってほしい。そのための参考資料などは随時提示する。

教科書

.使用しない..				

参考図書

その他

講義時にプリント資料を配布する。

〈参考図書〉
坂下裕子・山口智子・林創・中間玲子著（2014）．問いから始める発達心理学　生涯にわたる育ちの科学．有斐閣

授業計画

1.イントロダクション
　発達するとはどういうことか、最近の「発達」の捉え方を知る
2.発達の基本的な考え方、　遺伝と環境、可塑性、発達課題など
3.乳児期の発達
　赤ちゃんのとらえる世界：感覚知覚、感情の発達について
4.～5.
　親子関係の発達、　親子のつながり、アタッチメントと基本的信頼、虐待が発達に及ぼす影響
6.～7.
　理解度チェックテスト（1）の実施
　幼児期、児童期の認知発達、考えること、認知と感情、行動の関係について
7. 児童期の発達、　小1プロブレムや9才の壁について発達理論から考える
8.～9.
　自我の発達、　自我の目覚めから、思春期の反抗と自立、　青年期のアイデンティティの問題へ
10.　成人期の始まり、　モラトリアム期の延長として
11.～12.
　理解度チェックテスト（2）の実施
　成人期の発達　発達課題を通して
13. 成熟期の発達、　第2の人生にまつわる問題
14.　老年期の発達、発達の最終段階とは
15.　まとめ

授業形態（アクティブ・ラーニング）

	ア：PBL（課題解決型学習）		イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
	ウ：ディスカッション、ディベート		エ：グループワーク
	オ：プレゼンテーション		カ：実習、フィールドワーク
	キ：その他（ＡＬ型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）		

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の講義後に、講義内容について簡単な質問を課す。それに答えられない場合は、内容の基本的な部分を理解していないことになるので、その場合は内容について復習し、わからない個所は質問するなどしてほしい。
講義では乳児期から老年期まで、人の一生を対象とする。次回の講義がどの時期を対象とするのかは講義内で指示するので、その年代の特徴や社会的な問題などについてあらかじめ調べることが予習となる。
（予習復習を合わせて4時間程度）

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

目標①から③を達成することにより、日常生活と文化、人々の心理など現実社会のテーマに取り組み、よりより人間社会の創造の基礎となるため、DP（1）-①に貢献できる。また、他者への援助の実践に必要な知識を得ることができるため、DP（1）-②に貢献する。さらに、人間の精神機能と心理学の研究法に関する基礎知識を学ぶことになり、さまざまな場面に直面する人間の心理と行動の科学的分析と予測が可能になるため、DP(3)-1①に貢献する。そして、目標②、③の達成によって、援助を求める人の心理や行動の知識を有し、援助場面で心理を応用するというDP(3)-②に貢献できる。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

実務経験の有無及び活用

備考